

聖書：マタイ 16：1～12

説教題：用心すべきパン種

日時：2019年9月29日（朝拝）

異邦人の地へ出ていたイエス様は今日の箇所でもユダヤ人が住む地域へ戻って来ます。そこでイエス様を待っていたのは何だったでしょう。それはまたしてもパリサイ人たちの反対活動でした。しかもここではサドカイ人たちも加わっています。これは不思議な組み合わせでした。確かにパリサイ人とサドカイ人はユダヤの最高議会サンヘドリンを構成する2大勢力ですが、彼らは普段は仲が良くない人たちでした。彼らの主義主張は全く対立していました。聖書の他の箇所からも分かりますが、パリサイ人は復活や霊の存在を信じますが、サドカイ人は否定します。またパリサイ人らは一般民衆に人気がありました。サドカイ人らは金持ちや貴族出身が多い人々でした。このように彼らは神学的にも政治的にも立場が異なります。その両者が一緒になってイエス様を試すためにやって来ました。つまりここに示されているのはイエス様に対する敵意の増加です。そしてここには前の箇所と合わせて読むなら、大きなアイロニーがあります。15章31節には、異邦人の地での人々の反応として、彼らがイエス様のみわざを見て「イスラエルの神をあがめた」とありました。ところがイスラエルの地に戻って来るや否や、そこでイエス様が受けた扱いは敵意と憎悪だったのです。

さて、そのパリサイ人たちとサドカイ人たちはイエス様に天からのしるしを見せてほしいと要求します。「天」は「神」という言葉を使わずに神を表すための婉曲的表現です、つまり神からのしるしを見せてほしい。あなたには本当に神がついており、神から遣わされた使者であることを示す証拠としての奇跡を我々の前に示してもらいたいということです。イエス様はこのような要求には応じません。なぜならそれで問題は解決しないからです。たとえ彼らはそれを見たとしても、悪霊のかしらベルゼブルによってそうしているだけだと悪く取るだけです。旧約聖書にも奇跡はたくさん記されていますが、それを見た人々はみな信じたかという、そうではありません。荒野を旅したイスラエルも紅海が二つに分かれたり、毎日マナの奇跡を体験しながら不信仰でした。イエス様はむしろ、どうしてあなたがたは時のしるしを見分けることができないのか？と言われます。これは言い換えれば、しるしはすでにたくさんあるということです。あなたがたは夕方には夕焼けだから明日は晴れるだろうと言い、また朝に朝明けでどんより

していると今日は荒れ模様になると言う。そのように空模様を見分けることを知っているのに、なぜ時のしるしを見分けられないのかと。この「時のしるし」とは、神が約束したメシヤは地上に今来ているというしるしです。神が約束されたメシヤの時代が始まっているということです。イエス様はバプテスマのヨハネが牢屋の中から「私たちが待つべきメシヤはあなたですか、それともほかの方を待つべきですか」と尋ねた時、11章4～6節でこう言われました。「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」 また12章28節：「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」 このように神の国の夜明けが始まっているしるしはたくさんあったのです。なのになぜあなたがたは分からないのか？なぜ見分けられないのか？とイエス様は問います。足りないのはさらなるしるしではなく、それを認める心の目、靈的視力の方なのです。

イエス様は4節で「悪い、姦淫の時代はしるしを求めます」と言われます。この表現は12章39節にも出て来ました。神とイスラエルの関係は旧約以来、結婚関係にたとえられて来ました。神が夫、神の民が妻という関係です。しかし当時の人々は自分は神の民であると告白しつつ、神が遣わしたメシヤを受け入れず、神から心が離れていました。つまり靈的な意味での姦淫状態にある。そしてしるしを求めるようなことをしている。しるしを求める態度の問題点は、相手を自分が願う通りに操ろうとすることです。神ならこういうことをすることができるはずだ、あるいはそれをして見せるべきだという考えが自分の中にまずあって、その通りにすることを神に要求することです。そうして自分が神の上に来ることです。夫と妻の関係も同じです。夫と妻は互いに互いを信じて歩むべきです。しかし互いに試し合うようなことをしたらどうでしょうか。それは相手を自分の思う通りに操作しようとするということです。これは信じることの反対です。そして自分の思う通りでないと、自分の要求を満たしてくれそうな他の人のところへと足が向く。まさに姦淫です。

イエス様はここでも「ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません」と言います。このヨナのしるしについては、すでに12章39～40節で語られました。ヨナが三日

三晩、大魚の腹の中において、それから外に出て来たように、これはイエス様の死後3日目の復活を指します。これはしるしを見せてほしいという人々の要求に応じて行うものでなく、私たちの救いのために神がしてくださるのですが、もし決定的な証拠を見たいなら、それを見よ！とイエス様は言っているわけです。復活はそれほど私たちがよくよく注意して見つめるべき神のみわざであるということです。イエス様はそう述べて、彼らを残して去って行かれました。どこへでしょう。次の5節に「向こう岸へ」と書いてありますが、これは再びガリラヤ湖の反対側の異邦人の地へということです。イエス様は異邦人の地からユダヤ人の地へと戻って来たと思ったら、またすぐ外へ出て行かれた。不信仰がイエス様をこのように外に追いやったのです。せっかく戻って来たイエス様をまた遠くへ追いやった。私たちがそういう態度でいると、イエス様を遠くへ追いやってしまう。そしてイエス様の救いにあずかる機会を失ってしまうということを示唆しています。

さて、イエス様は向こう岸へ行かれた時、弟子たちに、たった今経験したパリサイ人たちとサドカイ人たちの応答を受けて、彼らのパン種にくれぐれも用心しなさいと言われました。すると弟子たちは何と応答したでしょうか。彼らは、イエス様がこんな話をしたのは我々がパンを持って来るのを忘れたからだと言って議論を始めました。イエス様はそれを聞いて嘆かれます。私たちがもしかすると、「ずいぶんと頓珍漢な議論を弟子たちは始めたものだ。ま、いつものことだが。」と思うかもしれません。しかしこのエピソードは他人事ではない大事な真理を私たちに語っていると思います。それは何でしょうか。それは私たちが普段何で自分の心を一杯にしているかで霊的な理解力は変わって来るということです。弟子たちはこの時、パンを持って来るのを忘れたということで、食べるパンのことばかり考えていました。それで頭と心が一杯でした。そんな時、イエス様がパン種のことを話されたので、あ～これは我々がパンを持って来なかったからだと彼らは受け取ったわけです。心の中がこの世のこと、この世の生活のことで一杯になっていたため、神の国の真理が入らなかったのです。参考になるのは前に6章25～34節で見たイエス様のお言葉です。イエス様はそこで何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って心配する必要はないと言われました。そうではなく、「まず神の国と神の義を第一に求めなさい。」これは言い換えれば、何を食べるか、何を着るかといったこの世の事柄に心が囚われていると、神の国とその義をまず求めるという生活ができなくなるということです。この世のことばかりに終始して、もっと大事な神の国

にすることが、その人の中心的関心にならなくなる。その結果、靈的な事柄を悟ることができず、そこに生きることができない人間となる。

この時の弟子たちはまさに食べるパンをどうしようかという、この世のことに心が囚われていました。そこでイエス様は言われます。あなたがたはまだ分からないのですか。覚えていないのですか。5つのパンを5千人に分けて何かご集めましたか。7つのパンを4千人に分けて何かご集めましたか。これらの経験から彼らが学ぶべきは、そういった食べ物などに関する必要はイエス様が満たしてくださるということです。神が満たしてくださるということです。だからそれについては神に信頼して、彼らとしては神の国とその義を求めることを自分たちの中心的関心としていれば良かった。しかし彼らはこの世のことばかり考え、心配していたために、イエス様が話題としたことを理解できなかったのです。

果たして私たちはどうでしょうか。私たちもこの世のこと、この世の生活のことに心が囚われ、それで心が一杯であると、イエス様が話される真理が分からなくなる。それが自分の中に入って来なくなる。ですから気を付けなければなりません。何に自分は第一の関心を向けて普段歩んでいるのか、もう一度点検しなくてはなりません。何を食べるか、何を着るかといったこの世の生活に関することは神に任せて良いと言われていています。そうではなく、まず神の国とその義を第一の関心としなさいと言われていています。もしそうしていたら、弟子たちはイエス様の話が分かったはずなのです。しかしそうでなかったのです、なぜあなたがたは分からないのかとイエス様に言われたのです。信仰の薄い人たち！と言われたのです。そう言われて仕方がない弟子たちの現実がそこにあったのです。

そしてイエス様は11節の最後で「パリサイ人たちとサドカイ人たちのパン種に用心しなさい」と言われました。パン種とは、最初は小さいものの、気がつかないうちに全体に浸透して、やがてとてつもなく大きな影響を与えるもののことです。これは良い意味でも使われますが悪い意味でも使われます。ここでは悪い意味で使われています。このパリサイ人たちとサドカイ人たちのパン種とは、彼らの不信仰の態度のことです。しるしを求める態度のことです。自分が定めた基準を満たすようなことをやって見せたら受け入れるかもしれないが、そうでなければ信じないという態度です。基本的にそこに

あるのは「信じないぞ！」という態度です。こういう悪いパン種は気づかない内に自分の内に働いて、大変な影響を与える。だからこのパン種に警戒し、影響されないように。むしろ開かれた心で神の福音に聞き、それが真理なら進んで受け入れる素直な心で神に応答して生きるように！と招いておられるのです。

私たちもパリサイ人とサドカイ人のパン種に用心したいと思います。彼らはさらなるしるしを要求しましたが、しるしはもう十分にある！というのが聖書のメッセージです。さらにそれを求めることはナンセンスであり、また間違いである。必要なのはもっと多くのしるしではなく、自分の心の目が開かれること、そこにあるしるしを認めることです。クリスチャンとはそのことに目が開かれた人です。その人はもっとしるしが欲しいとは思いません。もう十分です。証拠は十分です。イエス様が神が遣わされたメシヤであるしるしは満ちています。復活は大きな意味でそうです。私たちは自分の気ままな思いで、自分が願う通りに神が動くことを要求するのではなく、聖書に聞いて、はっきりとご自身を啓示しておられる神を知る者へ導かれたいと思います。

そしてまた今日の箇所からは、自分が何に関心を向けて歩んでいるのかをもう一度問われたいと思います。この世のことに心がどっぷりと漬かっていると神の国の真理が自分の心に入らなくなります。種蒔きのたとえで言えば 3 番目のいばらの土地の人です。この世の思い煩いや富の誘惑が心の多くを占めているために、御言葉の種が入り、それが育つための余地がない。その場所がない。私たちが召されているのは食べ物や着物といったこの世の生活は神に委ねて、もっと大事な神の国とその義を第一にして生きることです。そうするなら、神はその他の必要はすべて満たしてくださると約束くださっています。改めてこの神を見上げ、この神を信じ、この神に委ねて、その信仰の現れとして神の国と神の義をまず第一に求める歩みへと導かれたいと思います。そして神の国の真理をいよいよ悟り、その祝福に豊かに生き、またその御国の拡大と完成のために自らをささげて生きる歩みへと進んでまいりたく思います。